

東方短編集 ～ 物語は四季折々で色鮮やかな ～

ODA兵士長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それぞれの季節に（多分）合った短編物語の寄せ集めです。

普段は『東方夢喰録』というものを連載しています。

是非、そちらもよろしくお願いします。

*注意

東方projectの2次創作です。

基本的に思いつきで書いた駄文の為、超展開、ご都合展開のオンパレードです。

百合展開多め。

超絶ノロマ更新です。

目次

今夜だけ貴女に	1
明日、晴ればいいな	18
私の願いは	38

今夜だけ貴女に――

私は紅魔館の超優秀門番――ほんめいりん紅美鈴。

私がいる限り、招待された者以外は誰であつても、紅魔館に立ち入ることは出来ません。

つい先ほども、図書館の本を盗みに来た白黒魔法使いを追い返した………夢をみたところです。

今の私には、頭に銀のナイフが刺さっています。
これはこの紅魔館のメイド長――いざよいざくや十六夜咲夜さんのナイフです。

おそらく時を止めて私にナイフを突き刺したのでしよう。
私気付いた時には刺さっていました。
もし私が人間だったら死んでいたでしょうね。

寝ている私がいけないのですが、咲夜さんは躊躇なく私にナイフを刺してきます。

きつと咲夜さんは、私のことが嫌いなのでしょう。
お嬢様やパチュリー様、妹様や小悪魔さんには見せる彼女の笑顔
を、私に向けてくれたことは一度もありません。

最近では咲夜さんには人間の知り合いも増え、紅魔館の業務を終えた後に何処かへ出かけてしまうことも多くなりました。

以前は日課だった、咲夜さんと2人で行う庭の草花への水やりも、今は私1人で行っています。

――私は、寂しいのでしょうか？

いいえ。

私は、恋しいのです――

咲夜さんと出会ったのは、今から数年前のことです。

お嬢様が吸血鬼異変と呼ばれる騒動を起こしてから、間も無くのことでした。

その頃の私はメイドをしていました。

そんな私の業務の1つに、紅魔館の庭園の管理がありました。

今もその名残で、管理を任されているのですが。

それはさておき、私が庭の草花に水をやっているときの事でした。

「この花々は、貴女が育てたの？」

突然の声でしたが、私は驚きませんでした。

私は気配に敏感ですので、彼女の接近に気づいていたのです。

「そうですね。とても綺麗でしょう？」

「ええ。でも、紅が足りないわ」

「紅……う？」

「この館にふさわしい、紅い色が」

「ッ！」

そういう彼女の手には、銀のナイフが握られていました。

そして気付いた時には、私の喉はナイフで抉られていたのです。

紅い紅い血が、私の喉から溢れ出しました。

その時は何があったのか、全く分かりませんでした。

何も理解できぬまま、私は気絶してしまいました。

「……………」

気付くと、私はベッドの上に横になっていました。

「目が覚めた？」

私は意識が完全に戻っておらず、ぼんやりと天井を眺めていました。

そんな私にその声は突き刺さり、私は一気に目が覚めました。

「妖怪って凄いのね。人間ならアレで即死なのに……もう傷跡すら残ってないわ」

「……………」

私は驚きのあまり言葉が出ず、彼女をただ見つめる事しか出来ませんでした。

彼女は私のベッドの横で椅子に腰掛け、足を組んでいました。

彼女の手には銀のナイフと白い布があり、ナイフの手入れをしているようでした。

そんな彼女が、私の言葉が出ないことを察すると、口を開きました。

「私は十六夜咲夜。今日からこのメイドをさせて頂くわ」

「メイド……？」

「貴女、メイド長なんだって？まあ、そういう事だから。よろしくね」

「な……」

「どうして……？」

私が必死に絞り出した言葉が、それでした。

咲夜さんはナイフを拭く手を止めて、表情を変えることなく言いま

した。

「この名前も仕事も居場所も、全てお嬢様に頂いたの。この世界で唯一、私を理解してくださったお嬢様にね」

——パチンツ

次の瞬間、咲夜さんはドア付近に立っていました。

彼女が座っていた椅子には、トレイに乗った温かい食事が置かれています。

「今日はゆっくり休んで、明日からまた仕事に就くように、とお嬢様は仰っていたわ」

「これは……」

「貴女の食事よ。安心して、毒なんて仕込んでないから」

「……」

「それじゃあ、失礼するわ」

——パチンツ

いつの間にか、咲夜さんの姿は消えていました。

「一体、何だったの……?」

私の眩きは、私しかいないその部屋に溶け込み、消えていきました。

私の咲夜さんに対する第一印象は、殺されかけたことに対する憎悪よりも、不思議な人という印象の方が強かったと思います。

妖怪という種族柄、自身の死に対する感情があまりないからかもしれません。

もしくは、この時既に私の気持ちは――

そんな咲夜さんと共にメイド業務をこなしていると、彼女について様々なことが分かってきました。

まず、彼女が時間を操る程度の能力を持つということ。それにより、咲夜さんが起こした怪奇的な現象の全てが理解できました。

次に、彼女がレミリア・スカーレットお嬢様に心酔しているということ。

詳しいことはわかりませんが、私を倒した後、咲夜さんはお嬢様と戦ったそうです。

なんでも、咲夜さんは吸血鬼ヴァンパイアハンターだったそうです。

しかしお嬢様に敗北後、お嬢様から名前や仕事等を貰い、その恩義からお嬢様に仕えているようです。

そして、彼女は何でも卒なくこなすということ。

彼女は教えたことなら何でも出来るようになりました。

寧ろ、教えていること以上のことをしていました。

それこそ……私の立場が、無くなってしまうほどに。

べ、別に私は何かをやらかして門番になったわけではありません。

咲夜さんの一件後、門番の必要性を考えたお嬢様が、私を指名してくださいただけです。

元々体術には自信があつたので、引き受けさせていただけただけですよ！

最後に、咲夜さんは可愛いということですよ。

咲夜さんが綺麗な人であることは一目瞭然なのですが、時折見せる笑顔が本当に可愛らしいのです。

普段はツンとしていて、怖いイメージすらある彼女が笑うと……そ

の、ギャップというか……とにかく、可愛いんです。
だから私は、その笑顔が……咲夜さんが好きになりました。
これは絶対に打ち明けられない秘密ですが。

——でも。

咲夜さんがその笑顔を、私に見せることはありません。

私が見た彼女の笑顔は全て、他の方へ向けられたモノでした。
私に向かって笑いかけてくれたことは、一度もないのです。

「あら、寝てないのね」

「ッ!!」

「そんなに驚かなくても……私の気配、気がつかなかったの?」

「あはは……すみません」

「謝るくらいなら、仕事に集中しなさい」

「は、はい……」

「……これ、お腹すいたなら食べて」

咲夜さんは背後に持っていた小さなバスケットを差し出しました。

私を受け取り、掛けてあったナプキンを取ると、美味しそうなクッキーが顔を出しました。

「ありがとうございますー!」

私は渾身の笑顔で、咲夜さんにお礼を言いました。

咲夜さんの笑顔を期待していたのですが、彼女は私の顔を見ると、すぐに振り返ってしまいました。

「じゃあ、それだけだから」

そして足早に去ってしまいました。

やはり咲夜さんは、私のことなんて——

「……美味しい」

そのクッキーは、とても甘いものでした。

彼女の笑顔は私を幸せにするのだ。

——それは初めて会った時からそうだった。

初めて美鈴を見た時、彼女は微笑みながら花に水をあげていた。当時の私は、その顔が憎くて仕方がなかった。

私には絶対にできないその表情を浮かべる彼女が、憎かったのだ。

だから私は掻き切った——彼女の顔を歪めるために。

喉から血が噴き出し、彼女はその喉を抑えて倒れ込んだ。

彼女の顔は痛みで歪んでいた。

私は優越感や達成感に浸ると同時に、酷い悲しみを覚えていた。

もう、あの綺麗な笑顔を見ることはできないのだから。

そう思っていたのにも関わらず、彼女はすぐに復活した。

聞けば彼女は人間では無いらしい（そもそも、この館に人間など私
しかないが）。

妖怪の再生力には、かなり驚かされた。

それから彼女と共にメイドとして働くようになった。

彼女はいつでも笑顔だった。

どんな時でも、どんな者にも、笑顔だった。

それはもちろん私も例外ではなく、彼女の笑顔を沢山受け取った。

——でも、私は彼女に笑えなかった。

鏡で何度も練習した。

ぎこちなく笑えるようにもなったと思う。

しかし、そんなに綺麗な笑顔を見せられたら、自分が——自分の
笑顔が惨めに思えてくるのだ。

だから私は、彼女にだけは笑顔を向けられなかった。

「はあ……」

私はそんなことを思い、ため息を吐いていた。

「……ため息なんか吐いてると、幸せが逃げるわよ？」

「お嬢様……ッ」

私はいつの間にか、時間停止を解除してしまっていたようだ。

時間操作には多少なりとも集中力がある。

美鈴に集中しろなんて言っておきながら、自分の方が集中出来ないなんて……情けない。

「どうしたの？今日の貴女は、瀟洒じゃないわね」

「そんなことは……」

「まあいいわ。門番に餌付けをする前に、主人にお茶を出したらどう？」

「ッ……申し訳御座いません。只今用意致します」

——パチンッ

私は時間を止めると、急いでお茶の用意をした。

「……ふう、美味しいわ」

「ありがとうございます」

「初めの頃は貴女の紅茶なんて、飲めたものじゃなかったのに」

お嬢様はクスツと笑いながら言う。

「随分と腕を上げたわね、咲夜。これも美鈴のお陰かしら？」

美鈴の淹れる紅茶は美味しかった。

私と同じ作業をしてるのに、味がまるで違っていた。

「ええ。彼女に教わりましたわ」

私と美鈴の違いは、笑顔だった。

彼女は紅茶を淹れるときも笑顔を絶やさなかった。

だから今、私は精一杯の笑顔で紅茶を淹れ、お嬢様に差し出している。

「……咲夜」

「なんででしょうか、お嬢様」

お嬢様はもう一口紅茶を飲んだ後に、私に聞いた。

「貴女、美鈴が気に食わないの?」

「……え?」

今日は……寝てません。

頑張りました。

咲夜さんに、美味しいクッキーを頂いたので。

私は勤務を終えると、自室に戻っていました。

ここで睡眠をとった後に、朝から再び門番へと就きます。

夜は吸血鬼の時間である為、吸血鬼を襲う輩はやって来ません。

あの白黒魔法使いが来るのも昼間です。

だから私は日が出ている間だけ、門番をしています。

……紅霧異変の後からは、お嬢様も昼間に行動することが多くなり、その間に私が門番をする意味があるのかどうかは疑問ではありませんが。

しかし私は、お嬢様に仕える身。

お嬢様の言いつけ通りに業務をこなすだけです。

今夜もこうして睡眠をとり、明日に備えましょう。

「……美鈴、入るわよ?」

ノックの音が聞こえた後に、部屋の外から声がしました。

「え? あ、ど、どうぞ!」

突然の事に驚きが隠せなかったが、私は入室を許可しました。すると扉が開き、そこには咲夜さんが立っていました。

「美鈴、今日はここで寝かせてくれる?」

「ど、どうしてそのような質問を？」

「質問を質問で返すのは御法度よ」

「ですが……」

お嬢様の質問の意図を、私は図りかねていた。

私が美鈴を気に食わない？

ありえないのだが、どうしてそんな質問を？

私はお嬢様に——というより誰にも——美鈴に関する話をした事はない。

「まあいいわ。気になっただけよ。それで、どうなの？嫌いななの？」

「……嫌いでは御座いません」

「そう。じゃあ貴女……なぜ美鈴には笑わないのかしら？」

「そ、それは……」

「最近、貴女はよく笑うようになったわ。すでに貴女は、ここに来た時の貴女とはまるで別人のよう」

お嬢様は飲みかけの紅茶が入ったティーカップを置くと、私の目を見て言った。

「でも、美鈴にだけは笑わない。何故かしら？」

「……申し訳有りませんが、そのようなつもりは御座いません」

「そう……でも、きつと美鈴は悲しんでいるでしょうね」
「……」

「第三者である、私から見ても分かるのよ？美鈴が気付かない訳がないじゃない」

「ッ……」

「まあいいわ。私から言うことは、もう何もないから」

そう言うと、お嬢様は残っていた紅茶を飲み干した。

そしてそのカップを置き、私に言う。

「咲夜、貴女はこの後休息を取りなさい。時間を止めずにね」

「え……？」

「それと、寝る場所を変えても構わないわ」

「それはどういう……」

「いいからさっさと寝なさい。本来、人間なら寝る時間でしょう？」

「……かしこまりました」

私はお嬢様のティーカップを手にとると、一礼した。

「では、失礼します」

「ちゃんと笑いなさいよ」

「……はい」

ぎこちない笑顔とともに、私はお嬢様の部屋を後にした。

——美鈴が、悲しんでいる。

私の中で、そのことが引つかかった。

私が彼女に笑顔を見せないことで、彼女を悲しませているとは考えたことがなかった。

だって、私の笑顔なんて彼女のそれに比べたら……

——ちゃんと笑いなさいよ。

そうだ。

これは、お嬢様からの命令だ。

私はその命令に従って、美鈴に笑顔を見せるだけだ。
そう、それだけだ……それだけ……それだけ。

「え………えっ!？」

「駄目かしら?」

「駄目じゃないです! 駄目じゃないですけど……」

私は意味が分かりませんでした。

咲夜さんは第一印象と変わらず、不思議な人です。

「なら、いいでしょう?」

「え……あ、はい。ど、どうぞ……」

私はとりあえずベッドに腰掛け、横に座るように催促してみました。
た。

咲夜さんはその指示通りにそこに座ると、真っ直ぐ私の目を見ました。

咲夜さんの整った顔は、私の頬を火照らせるのに十分すぎるほど綺麗なものでした。

「私はお嬢様に仕えているわ。お嬢様が全てだし、お嬢様の為なら死を選ぶ覚悟だってある」

「……」

「私はお嬢様を愛してやまないわ」

「ッ……」

分かっていました。

貴女の好意の矛先が、私に向かないことなんて。

「……美鈴は、今日が何の日か知ってる?」

「今日……?」

「4月1日、世間ではエイプリルフールと呼ばれる日」

「エイプリルフール……って、あの嘘をつく日ですよ?」

「そうよ」

そう言う咲夜さんの手は、私の頬を撫でるように滑り、そのまま私の赤髪をくぐりました。

「今夜だけ貴女に——ウソをついても、いいかしら?」

月明かりに照らされた咲夜さんの頬は、幾らか紅くなっているように見えました。

「……え、その……ウソ、ですか？」

ポカンとした表情を浮かべる美鈴。

彼女は少し頬を赤らめながら、私のことを真っ直ぐ見つめた。

私はもう限界だ。

顔から火が出るとは、まさにこのことなのだろう。

「そう、ウソよ。エイプリルフールのウソ」

「……一体何を？」

「私は、貴女が好き」

「……え？」

「貴女の笑顔が好き。私はそれを見るだけで、幸せな気分になるの」

私は勢いに任せ、素直に言った。

包み隠さず言った。

これはウソではない。

しかし美鈴はきつと、この私の気持ちがウソだと思うだろう。でも、それでいい。

私はただ、貴女の笑顔が見たいだけだから――

私は精一杯の笑顔を、美鈴に向けた。

「やっと笑ってくれましたね！」

咲夜さんに負けないように、私も精一杯の笑顔を浮かべました。

でも咲夜さんの笑顔はやっぱり可愛くて、私のそれとは比べ物にならないモノでした。

―― だけど、こうして笑い合えるだけで、私は幸せでした。

咲夜さんの気持ちウソだということは分かっています。

でもこの時は、ウソじゃない。

笑いあったという事実は、絶対にウソじゃありませんよね？

「大好きです、咲夜さん」

明日、晴れればいいな

「今日も雨……」

7月に入って少し経ったある日のこと。

幻想郷の存在する日本では、梅雨と呼ばれる時期が訪れていた。

私は障子の戸を少し開けながら、誰に聞かせるわけでもなく呟いていた。

最近、お日様を見かけなくなっただけから、参拝客がめっきりと減った。

降り頻る雨の中、わざわざこんな辺鄙な場所にある博麗神社を訪れるモノ好きなんていないのだろう。

——元々、参拝客なんていないけど。

でもそれは人間の参拝客ってこと。

妖怪の参拝客(?)なら、毎日毎日飽きもせず此処へやって来る。

そいつらの所為で人間の参拝客が来ないのだ、と普段は思っていた。

そう思っていたからこそ、あいつらが来ることに良い印象はなかった。

——何故か、悪い印象も持たなかったが。

本来は退治すべき対象の妖怪を、快く迎えることはなくとも、追いついて払うことは決してしなかった。

どうしてだろうか？

今までにも考えたことはあったが、分からなかった。

「……」 さみしい」なんて感情が、私にもあったのね」

私はそう言いながら、戸を閉めた。

雨は降り続けている。

「……ッ」

少し、寝てしまったようだ。

私は一度立ち上がり、んんっという声を漏らしながら身体を伸ばす。

そして枕代わりをしていた、二つ折りになっていた座布団を広げて腰を下ろす。

ため息をつきながら、ちやぶ台を何となく眺めると、眠る前に淹れたお茶があった。

そのお茶は既に冷めきっていた。

でも、その冷たさが私の喉には嬉しかった。
残っていたそれを飲み干すと、私は流し台へとそれを片付け、洗って乾かしておいた。

「……」

雨は降り続けている。

「霊夢！貴女、何をしているの!?!」

私が呑気に欠伸をしていると、スキマの中から八雲紫が現れた。

「……ああ、悪いわね。暇だったのよ」

「暇だった、ですって?」

紫は眉間に皺を寄せ、私を睨みつけた。

私はもう一度欠伸をした。

先ほど昼寝をしたはずだが、まだ眠い。

「また私を呼ぶために結界を……」

「いいじゃない、あんたも暇でしょ?」

「はあ……確かに刺激にはなるかもしれない。けど、貴女が結界を緩めることで外の世界の物が流れ込んで来たらどうするつもりなの?」

「……」

「幻想郷のパワーバランスが壊れるような事、あつてはならないわ。貴女はもう少し危機感を持って——」

紫を呼んだのは失敗だったかもしれない。

「——って、聞いているの？ 霊夢！」

「え？ ああ、まあ」

「……貴女が言っても聞かない子だつてのは分かっているから、これくらいにしておくわ」

「帰るの？」

「本当に反省の色が見えないわね、貴女は」

「まあ、してないからね」

「何モノにも縛られない、貴女らしいと言えばらしいけど」

「……あ、そうだ。1つ頼みことがあるんだけど」

「何かしら？」

「この雨、何とかしてくれないかしら？」

「どうして？」

「暇なのよ。この雨の所為で」

「いいじゃない。雨が降れば、妖怪が来ることも少なくなるわよ？」

「……」

「それともまさか、巫女である貴女が妖怪が来ることを望んでいるのかしら？」

「……魔理沙や咲夜、早苗が来られないからよ」

「へえ……まあ、何にせよ、私にはどうする事も出来ないわ」

「晴れと雨の境界くらい、弄れるんじゃない？」

「出来ない、と言うのは語弊があるかもしれないわ。でも、やはり出来ないのよ」

「はあ？」

「この幻想郷、もとい日本にとって梅雨は大切に必要不可欠な雨季よ。そんな時期に雨を減らすようなことをしてはいけないわ」

「……あっそ、使えないわね」

「そういうこと言うのね。少し協力しようと思ったけど、辞めたわ」
「え、ちよつと……」

紫はスキマを開くと、そそくさと何処かへ消えてしまった。

「……スキマで、誰か連れて来てくれれば良かったのに」

私の呟きは、雨音に掻き消された。

雨は降り続けている。

紫が消えて、少し経った。

私は台所で夕飯の支度をしていた。

今日は山菜の天ぷらをツマみながら、日本酒を飲むつもりだ。

調理を終え、居間のちゃぶ台へと運ぶ。

鍋に入った大量の油は、揚げカスを取り除いた後に、別の容器に入れ替え保管しておいた。

あまり時間が経つと酸化してしまうので、早めに使わなくてはならない。

天ぷらは好きだが、こうした後処理が面倒だ。

私は塩を盛った小皿と、日本酒を用意して、手を合わせる。

「いただきます」

小さな頃から習慣となつてこの動作には、食材となつた動植物に感謝するという意味がある。

しかし、感謝されたところで食われる事には変わりがない。

もし自分が食材側だとしたら、感謝されたところで喜ばないだろう。

結果は変わらないのだから。

——でも、どうせなら美味しく食べて欲しいかもしれない。

不味いと思われたり、無駄にされたりするよりはマシかもしれない。

「……美味しい」

雨は降り続けている。

「……おいしい」

喉が焼けるような感覚を感じながら、私は胃へ日本酒を流し込むよ

うに飲んでいた。

コップに一杯の日本酒を、一気に飲み干した。

酒には頗る強い自信があるが、流石に少しフラツと来た。

三半規管が少しやられたような気がするが、思考は至って冷静だった。

冷静だと思っただけかもしれないが。

「……」

でも一回……二回と深呼吸をすると、頭が冴え、平常時に戻った。

ただ、少しだけ頬が熱い。

「……さみしい」

無意識だった。

呼吸をするように、自然な流れで呟いていた。

もう一杯、日本酒を喉に流し込む。

体が火照る。

「……」

少し悔しかった。

だが、本当のことだ。

——私は、さみしくて堪らない。

「……」

私は再びコップに日本酒を入れると、それを持って立ち上がる。

そして、縁側に面した襖を少しだけ開けた。

まだ、雨は降り続けている。

「——明日、晴ればいいな」

「おー、今日もすごい雨だぜ」

私は窓から部屋の外を眺めていた。

ザーツという音と共に大粒の雨が地面を打ち付けていた。

「こりゃ梅雨明けは、まだまだかなあ」

雨は嫌いじゃない。

ただこうして眺めていると、不思議と美しさを感じる。

雨粒の落ちる細い線、地面に落ちて跳ねる雨水、草や木には大粒の雫がキラキラと輝いている。

そして私は、この雨の音も好きだった。

——しかし、雨が降ると外には出られない。

傘を差して歩くには、地面がぬかるんでいるし、そもそも私の家は少し森の奥にあり過ぎる。

魔法で雨を避けながら飛ぶこともできるが、あの魔法薬は割と貴重なものだったりするから極力使いたくない。

「はあ……暇だなあ」

雨は降り続けている。

「……」

私は紅魔館の図書館から拝借してきた魔道書に読み耽っていた。

私には夢がある。

魔法使いになることだ。

今だって充分魔法使いと言えるかもしれないが、厳密に言えば私は魔法使いではない。

魔法が使えるだけの”人間”なのだ。

私は”魔法使い”になりたい。

「……」

「だけど私は”人間”でありたいとも思う。

「私はこの世界に”人間”として生を受けた。

「私はその生を全うしたいのだ。」

「……いや、本当は違うかもしれない。」

「私は霊夢の隣に立ちたいだけなのだ。」

「霊夢と対等に、肩を並べて立ちたいだけなのだ。」

「それなのに私だけ人間をやめてしまったら……不公平だろ？」

「それでは霊夢の隣に立つ資格なんて無くなってしまう。」

「だから私は”人間”でありたい。」

「……お前がここに来るなんて、珍しいじゃないか？」

「そんな矛盾した夢を持って、私は魔法の勉強をしている。」

「今もこうして、半分も理解できない魔道書を読んで知識をつけよう

としているのだ。」

「正直、読むより実践したほうが早いから、あんまり黙って読むだけなのは好きじゃないのだが」

「あら、分かるのね。あなた程度の人間にも」

「お前が、私程度の人間すらバレる程度の妖怪ってことなんじゃないか？」

「面白い冗談ね」

「ちようど今、魔道書を読んでいて分からないことがあったんだ……実験をしたいだが、いいか？」

「いいわよ。何かあっても私は無事だろうし。貴女とこの家がどうなるかは知らないけど」

「ははっ……まあ、冗談さ。それで？何の用だよ、紫？」

「何も無い空間に謎の亀裂を作り、そこに腰掛ける女——八雲紫は扇子で口元を隠しながら微笑んでいた。」

「私と軽口を言い合うのを楽しんでいるのだろうか。」

「用もなく訪れちゃ、いけないかしら？」

「……そんなに仲が良かったのか、私達は。知らなかったぜ」

「酷いわねえ。一応私は、貴女に一目置いているつもりなのだけど?」
「そいつは嬉しいぜ。かの偉大な妖怪の賢者様に一目置かれていたなんてな」

「一応、だけれど」

「……まあいい。私だつて暇じゃないんだ、用件を言えよ」

「そう……貴女は暇じゃないのね」

「は……?」

「暇じゃないのなら、貴女に用はないわ」

「え?お、おい!ちよつと待てよ紫!」

紫はすぐにスキマに入ると、それを閉じてしまった。

「……一体何だったんだ、あいつは?」

私はふと、窓の外を眺めた。

先ほどと変わらず、強い雨が大きな音を立てて窓を叩いていた。

「まあ、いい暇つぶしにはなったかな」

「暇つぶしってことは、やっぱり暇だったのかしら?」

「うわっ!」

「あら、驚いた?今度は分からなかったのね」

紫は、まるで無邪気な少女のように笑っていた。

「いきなり出て来るなよ……ってか、盗み聞きなんて良い趣味をするじゃないか?」

「まあまあ、良いじゃない」

私はそんな紫を睨みつけてやるが……あまり効果はないようだ。

「ところで貴女、暇なんでしょう?」

「まあ、暇だぜ」

「今から、私とデートでもどうかしら?」

「……は?」

この時の私は、心底驚いた表情をしていたと思う。

雨は降り続けている。

私は紫と共に、傘を差して人里を歩いていった。
もちろん別々の傘で。

雨の日の人里は、どこか寂しそうな雰囲気だった。
いつもなら寺子屋の子供達が走り回り、店の店主らが大きな声を出して客を呼び寄せている。

しかし今日はそんな様子は見られず、傘を差して黙々と歩く人影が
チラホラと見えるだけだ。

「おい、そろそろ目的を教えてくださいませんか？」

「だから、ただのデートですわ」

「……だったら霊夢と行けばいいだろ」

「霊夢じゃダメなの」

「なんでだよ……？」

「さあ、着いたわよ」

突然紫が立ち止まる。

私も慌てて立ち止まった。

「え……ここって……」

「さあ、入りましょう」

雨は降り続けている。

降り頻る雨を、私はただ眺めていた。

何故だろう？

私の心は少し晴れていた。

なんだか良い予感がする。

……飲み過ぎただろうか？

いや、まだ大した量は飲んでいない。

私は開けていた襖ふすまを閉じると、再び座布団に腰掛け、ちゃぶ台の上の天ぷらに手を伸ばす。

少し時間が経ったからか、それとも雨による湿気からか、少ししんなりしてしまっていた。

「美味しい」

それでも私には美味しかった。

だがそれは食材のおかげでも、私の調理法のおかげでもない。

ただただいい予感がする、そのことに心が弾み、しなしなの天ぷらささえも私の舌は美味しく感じていた。

「霊夢ーッ！遊びに来たぜーッ！」

雨は降り続けている。

「あれ、出てこないな？」

「縁側の方へと回ってみましょう」

「ああ、そうだな」

私と紫は歩いて縁側へと向かった。

「……なんだ霊夢、いるんじゃないか」

縁側に1人の少女が立っていた。

その少女は右手にコップを持ち、左手に酒瓶を持っている。

「もう飲んでるのか？まだ日も落ちてないってのに、ちよつと早すぎ

……霊夢？」

私の間違いかもしれない。

こんなにも雨が降っているのだ。

「霊夢……泣いてるのか？」

霊夢の頬には雫が滴っていた。

それは葉っぱの上の雨粒のように、キラキラと輝いていた。

「……早く入りなさい、2人とも」

「あ、ああ。邪魔するぜ」

「お邪魔しますわ」

霊夢は襖を開けて中に入った。

続いて私、紫の順に入り、紫が襖を閉めた。

霊夢はちやぶ台にコップと酒瓶を置き、座布団に腰掛ける。

ちやぶ台の上には、山菜の天ぷらがあった。

それは幾らか、しんなりしているように思えた。
私と紫も、敷かれていた座布団の上に座った。

「霊夢……大丈夫か？」

「……何が？」

「だってお前……泣いて……」

霊夢が音を立てて鼻をすする。

その目は酷く充血していた。

霊夢は私の目を見た後に、少し俯いた。

「……しかった」

「ん？」

「さみしかった」

「……え？」

「雨だから誰も来ない。1人は、さみしかった」

「霊夢……？」

いつもの霊夢ではなかった。

霊夢がこんな弱みを見せるなんて、なかなか無い。

……いや、全くなかったんだ。今までは。

「さみしかった……だから、お前は泣いてるのか？」

「違う」

霊夢が顔を上げた。

「——魔理沙が来てくれて、嬉しいの」

そう言う霊夢の顔は、とびっきりの笑顔だった。

雨は降り続けている。

「ほら、飲みましょう。2人とも」

紫が何処からかコップを2つ持ってきた。

そのうち1つを魔理沙に手渡すと、ちゃぶ台の上の酒瓶を手に取り、自酌した後に魔理沙のコップにも酒を注ぐ。

「はい、乾杯」

紫は一方的にコップを当てると、酒を喉に流し込んだ。

「くああ……いいわねえ、お酒って。ほら、貴女達も飲みましょう?」

紫は再び自酌すると、コップを私達に向ける。

「……ああ、そうするぜ。乾杯」

魔理沙はそのコップに自分のコップを当てると、先ほどの紫のように酒を飲む。

「くーっ、こりゃキツイぜ」

「ほら、霊夢も」

紫は私にコップを向けた。

「……ありがとう」

自然と感謝の言葉が湧き出てきた。

どうしてかは、自分にもよく分からない。

何に對してかも、自分ではハッキリしない。

ただ、紫は微笑んでいた。

「ふふっ、ほら乾杯」

「乾杯」

私が紫のコップに自分のコップを当てると、私は一気にそれを飲み

干した。

そして深いため息をしてから紫を見た。

紫も同様に、飲み干していた。

「私も霊夢と乾杯したいぜ！」

雨は降り続けている。

「紫のやつ……調子に乗って飲み過ぎだな。あいつが潰れるところなんて初めて見たぜ」

「……そうね」

「にしても、霊夢は本当に酒強いな。酔ってんのか？」

「まあ、一応はね」

私は魔理沙と縁側に腰掛けて、降り続けている雨を眺めていた。

紫は既に眠ってしまった。

……あいつのことだから、本当に寝ているかは定かでないが。

とにかく私は、魔理沙と2人で話をしている。

「一応かあ……一応と言えば、紫のやつ、私のこと『一応』一目置いてるらしいぜ。嬉しいっちゃ嬉しいが、一応ってなんだよ一応って」
「そりゃ、一応でしょう」

「あー？そういうことじゃなくてなあ！その……だから……えーつと、あれだ！」

「何よ？」

「もつと強くなって、霊夢と……」

「……私と？」

「ああ……いや、何でも無いぜ。私は強くなる！」

「そう……別に魔理沙は、今でも十分強いでしょうに」

「いや、まだ足りない。私は認めないぞ！認めないー！！」

魔理沙はそう言いながら、ゴロンと体を倒し寝っ転がった。

「魔理沙、だいぶ酔ってるわね」

「酔ってないぜ私は！」

「ふーん」

「なんだよ、冷たいなあ……」

そんなことを呟きながら、魔理沙はスツと体を起こす。

そして、私のリボンに触れた。

「よく似合ってるぜ」

「……あんたらが選んだんでしよう？私に似合いそうなものを」

「それはそうだが、実際に付けてみて改めて思ったんだ」

「……そう。ありがとう」

今私が頭に付けているリボンは、先ほど魔理沙と紫から手渡されたものだ。

今日、人里で買ってきたらしい。

「霊夢……ごめんな」

「いきなり何？」

「……言ってたじゃないか、さみしかったって」

「……」

「この雨じゃあ、あまり外に出る奴もいないし、仕方ないのかもしれないな

いが……それでも、ごめん」

「魔理沙が謝ることじゃないわ」

「いいや、私は謝らなくちゃならない」

「……え？」

「だって私は霊夢のことが——」

雨は降り続けている。

「霊夢」

「どうしたの、魔理沙？」

「——明日、晴ればいいな」

雨は降り続けている。

私の願いは――

「パチエ、何をしているんだ……?」

「ああ、これ? 幻想郷のある日本では、7月7日になると、短冊に願いを書いて、それを笹にぶら下げる習慣があるらしいのよ」

「へえ……それは大層滑稽な習慣ね」

「あら、そうかしら? ロマンがあつて素敵じゃない?」

「ロマン?」

「ええ。元々七夕というのは、織姫と彦星の逢瀬を……」

「ああ、その話なら聞いたことがあるわ。年に一度しか会えないんだって?」

「なんだ、知ってるの?」

「何かで聞いたのさ。でも、短冊の方は知らなかったよ」

「どう? レミイも書いてみない?」

「本気で言っているの、パチエ? 私の能力は……」

「はあ……レミイ。貴女、そんなこと言ったらツマラナイわよ?」

「でも、こんなので願いが――」

「……レミイ?」

「――いや、書こう。短冊を一枚くれる? それとペンを貸してくれ」

「どういう風の吹き回しかしら? まあいいわ。どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「さてさて、レミイはどんな願いを書いたのかなあ?」

「それは秘密だ……と言いたいところだけど、笹に飾るのなら、結局バレちゃうのね」

「そうそう、だから見せなさい」

「いいよ。別に恥ずかしいことを書いたわけじゃないさ」
「どれどれ……………ッ！」

パチユリーは目を見開いた。

「レミイ、貴女……………これって……………」

「ふあああ……………よく寝た」

大きく聳え立つ紅い館の、これまた大きく豪華な門の前にいる私――

――紅美鈴は、欠伸をしてのびをしながら呟いた。

「さて、そろそろお昼の時間かなあ。咲夜さん、まだかなあ」

そんなことを呑気に呟いていると、鋭い気と共に背後から足音が近付いて来た。

それはこの館のメイド長――十六夜咲夜さんのものである。

その名の通り、夜に咲く花のように、いつも凜とした彼女の気は少し棘がある。

「……………美鈴、昼休憩の時間よ」

「はい！咲夜さん、今日のお昼ご飯はなんですか？」

「今日はビーフシチューよ」

「おお、いいですねえ！」

「でも残念。ちゃんと働かないと上げられないわ」

「ええ、そんな！私、今日は起きてたじゃないですか！」

「今日は……ねえ。さつき欠伸をしながら『よく寝た』なんて言っただけのは、何処の誰かしら？」

「なッ……き、聞こえてたんですか!？」

「あら……本当に言っていたのね」

「え、まさか当てずっぽうだったんですか!？」

「ええ、適当に」

「そ、そんなあ……」

「ふふっ。まさか当たるとは思ってたけど」

「お昼、無しですかあ……?」

「……そうねえ。私は予想で言っただけで、事実確認はまだしていないのよ。私の独断と偏見で貴女の昼休憩を無しにすることはできないわ」

「っ、つまり?」

「貴女、本当に寝ていたのかしら?」

「え?」

「この質問に貴女がどう答えようと、私は貴女の言葉を信じてあげるわ」

「そ、それって……」

「さあ、早く答えなさい」

私は迷っていた。

ここで『寝ていません』と答えれば、おそらく咲夜さんの言い方がらすれば、お昼ご飯を頂けるのだろう。

しかしそれでは、咲夜さんに嘘をつくことになる。

逆に正直に『寝ていました』と答えれば、いつも通り昼休憩は無くなり、私は空腹に耐えながら仕事をしなければならなくなるのだろう。

「どうしたの、美鈴?」

「……すみません、咲夜さん」

「?」

私は迷った挙句――

「寝ていました。咲夜さん来る直前まで、ずっと」

――正直に言うことに決めた。

「……ふふつ、馬鹿ねえ。折角、見逃してあげようとしていたのに」「すみません……」

「いいわ。ほら、早く来なさい美鈴」

「……え？」

「正直に言えたご褒美に、ビーフシチューを振舞ってあげるわ」

「……はいっ!!」

「おお、今日は美鈴も居るんだな。ちょうど良かった」

「お、お嬢様。今日”も”居るんですよ……ちょうど良かった?」

「まあいいじゃないか。さっそく頂くとしよう」

幻想郷に来てから、お嬢様は昼に生活を送ることが多くなった。

そして以前まではこんな風に食卓を囲むこともなかったが、今では

友人であるパチュリー様に加えて従者の私や美鈴も一緒に食卓を囲んでいる。

お嬢様は丸くなった。

それは勿論、良い意味で。

「今日も美味しいよ、咲夜」

「ありがとうございます、お嬢様」

お嬢様が笑顔で『美味しい』と言ってください。

それが私にとっては、何よりも嬉しい事だった。

「そうだ、2人とも」

お嬢様が私と美鈴に向かって話しかける。

「なんででしょうか、お嬢様？」

「今日は7月7日、七夕だ」

「ああ、それなら聞いたことがあります！確か織姫様と彦星様が一年に一度会うことができる日……でしたよね？」

「ああ、そうさ。そしてそんな日に日本では、願いを書いた短冊を笹に飾るらしい」

「……短冊、ですか？」

「そうそう。様々な願いが込められた色とりどりの短冊を笹に飾るんだ。中々綺麗なものだと思わないか？」

「……最初は滑稽とか言ってたくせに」

「うるさい、気が変わったんだ」

「ふーん」

「お、お嬢様。それで、私共は一体何を……？笹と短冊の用意ですか？」

「いいや、違うよ。笹と短冊なら、既にパチエが用意しているしな」

「では、何をすればよろしいのでしょうか？」

「お前達にも、短冊に願い事を書いて、笹に飾って欲しいんだ」

「願いを……？」

「いいですね！やりましょう！何書こうかなあ」

「なんでもいいんだ。好きなことを書いて欲しい。私はその内容に関して咎めることはしないさ」

「幾つまで書いてもいいんですか？」

「それは……パチエ、どうなんだ？」

「別に制限はないわ。書きたいことがたくさんあるなら、たくさん書いてもいいんじゃないかしら？」

「……だそうだ」

「やった！じゃアレとコレと……ああ、アレも書きたいツ！」

「それと咲夜、フランにもこの事を伝えておいてくれるか？あの子が起きてからでいいから」

「はい、承知致しました」

「頼んだよ。それじゃあご馳走様。咲夜、後はよろしくね」

「はい、畏まりました」

綺麗に食べ終わったお嬢様は、既に食べ終わっていたパチユリー様を連れて外へと出た。

美鈴は未だに願い事を考えているようだ。

「……お口に合わなかったかしら？」

「へ？」

「残しているし、手が止まっているじゃない」

「あ、いや、これはッ」

「冗談よ。でも、片付けたいから早めに食べてちょうだいね」

「はいっ！」

「これに書けばいいの？」

「はい、そうですよ」

「んー、何書こうかな」

「妹様のお好きなように書いていいんですよ」

「んん……あ、美鈴は何て書いたの？」

「わ、私ですか？」

「うん。教えてよ」

「えつと……寝てもバレないようにになりたい、寝ても怒られないようになりたい、もつとたくさん寝たい、寝ても——」

「もういいよ。美鈴、寝ても〇〇が多すぎるよ」

「あはは……でも、私にとっては大事な願い事なので」

「そっか。じゃあ私の願いは——」

——もつとたくさん遊べますように。

「ふふつ、フランはまだまだお子様ね」

「あらレミィ。嬉しそうね？」

「そうかな？まあ……そうだな」

「もつと遊びたい。そんなフランの願いを叶えられるのは貴女よ、レ

「ミイ」

「そんなことは分かっているさ。幻想郷に来て、霊夢達に会ってから、あの子は変わった。私も少し、過保護すぎるのかもしれないな」

レミリアは妹の成長を嬉しく感じながらも、何処かで寂しさを感じているようだった。

500年以上生きてきたレミリアにとって、5年など、ほんの一瞬である。

しかし、5歳年下の妹を、まるで娘のように考えていた。

レミリアにとっては唯一の肉親であるが故なのだろうか。

「ところでパチエ、お前は何と書いたんだ？」

「そんなに見せたくないのだけど」

「いいだろう？ どうせ飾ったらバレるんだから」

「……まあ、分かったわよ。私の願いは——」

——喘息が治りますように。

「はあ、パチエの奴め。ロマンだの何だのと言ってたくせに、願い事がシヨボいなあ」

「……パチュリー様には、重大なことなのかもしれませんよ？」

「確かにあいつの喘息が治れば、もつと力を発揮できて、さらに強力な

魔法使いになるわ。でも、この短冊に書くことか？」

「それは……えっと、どうでしょうね」

「……まあいいや。ごめんなさいね、困らせちゃって」

「いえ、構いませんわ」

「それで、咲夜の願いは？」

「……ご覧になれますか？」

「嫌なの？」

「いえ。ただ……些か恥ずかしく感じるもので……」

「大丈夫、誰にも言わないわよ。まあ、どうせ飾るんだからバレるけど」

「……分かりました。言いましょう」

「ええ。教えてちょうだい」

「私の願いは——」

——お嬢様に一生仕えられますように。

「全く、咲夜は本当に馬鹿な奴だ」

「……」

「あんなものに願わなくとも、死ぬまで私から離れるなど許さんのに」

「……お姉様、口元が緩んでるよ」

「う、うるさい」

「そういえば、お姉様は何を願ったの？もうみんな飾ったのに、お姉様のが見当たらないんだけど」

「私のは、今から飾るんだよ」

「見せて見せて！」

「そう焦らないの。今飾るんだから」

「お姉様の事だから、きつと下らないことを……ッ！」

フランは目を見開いた。

その視線の先には、レミリアの短冊がある。

「私の願いは——」

——紅魔館の皆の願いが叶いますように。

——
いや、紅魔館の皆の願いを叶えられますように。